

鳥海イヌワシみらい館通信

Vol,33 2020年 新年号



鳥海イヌワシみらい館
マスコットキャラクター
「ワッシーくん」



バードウォッチングへの誘い③②その時代と猛禽類
突撃！鳥海イヌワシみらい館①④ ネイチャーアカデミーもがみ 矢口末吉氏
蜂蜜の森から①②「和蜂と洋蜂」

「オオワシ」撮影：佐々木真一

その時代と猛禽類

時代によって物の見方は変わるものです。
これから猛禽類や環境を私たち人間がどうとらえていくのか、
新しい時代を迎えた今こそ過去から学ぶべきです。

アイヌ民族はオジロワシ・オオワシの尾羽を大和人との交易のために使っていました。真っ白な尾羽は上級武士であることのステータスとされ高値で取引されました。

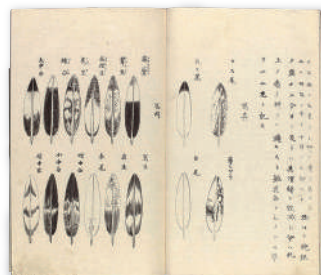
古代～中世

山形県～秋田県の旧国名を「出羽の国(いではのくに)」といいました。酒田市光丘文庫に所蔵されている『類聚鈔』によれば、この地名は「第19代允恭天皇に鳥の羽を土地の産物として献上した」のであたえられた名前であるとの説があります(諸説あります)。なぜ鳥の羽を贈る必要があったのかといえば、当時の武器である「弓矢の矢羽」に使用するために必要とされました。現在各地の資料館に残る弓矢のほとんどに猛禽類の羽が使用されています。また猛禽類は羽を得るためだけではなく、武士のたしなみである「鷹狩」のためにも飼育されていました。鷹の羽をモチーフにした家紋が

あるなど、多くの人が自然や生き物たちと本当の意味で共生していた時代だったのかもしれません。

近世

弓矢が鉄砲に代わり羽の需要はだんだんなくなっていきます。幕末には庄内松山藩付家老松森胤保の著した『両羽博物図譜』の中で「昔、猛禽類の羽は武士にとって重要なものだったが、今となっては机の上の塵を払う程度の物」との記載があります。明治維新後、武士の中だけで行われていた鷹狩が、一部の農民やマタギの間でも行われるようになりました。



『両羽博物図譜』鷹隼部上より(酒田市光丘文庫所蔵)

現代

「特殊鳥類の譲渡等の規制に関する法律」によって、クマタカの飼養・譲渡等ができなくなったことで、昭和61年、秋田県羽後町で最後の鷹匠武田宇市郎氏による「鷹匠廃業宣言」により、生業による鷹匠も終わりを迎えます。経済成長と引き換えに多くの自然環境が失われ、化石燃料の普及と拡大造林によって里地里山の利用がされなくなったことで、人との共生の鎖が切れ、住処を追われた猛禽類もいます。昭和から平成にかけて多くの環境問題が表面化し猛禽類の保護が唱えられました(平成8年「猛禽類保護の進め方」策定)。



鷹匠 沓澤朝治
写真提供: 真室川町歴史民俗資料館



西川北洋: 画「アイヌ民族絵巻」鷲捕りより(函館市中央図書館所蔵)

これから

平成の終り頃から広まった森林施業が全国的に行われています。人の暮らしのために木を使い、創出された環境を猛禽類たちが利用するといった、人も動物も持ちつ持たれつの関係になることを願いたいと思います。

令和

庄内の動物情報コーナー

12月現在、記録的な暖冬となっている山形県庄内地方です。例年であれば大掛かりな除雪作業をして年末年始を迎えるのですが、今シーズンは猛禽類保護センターのある標高500m地点でも積雪数センチ程度と、冬将軍ならぬ冬足軽程の強さとなっています。各地の自然情報をmoukin@raptor-c.comまでお寄せください。



2019/10/1「アカタテハ」遊佐町
「蕎麦はまだ花でもてなす山路かな-芭蕉」。客人を蕎麦でもてなしたいが、あいにくまだそばは収穫できない、せめて花を愛でていってほしいという意味の俳句ですが、アカタテハがしっかりとそばを味わっています。
撮影: たっちゃん様



2019/10/20「アジサシ」酒田市
台風19号が通過したのち、最上川河口付近にいたそうです。旅鳥なので出会いのタイミングが難しいですが、台風一過が引き合わせた偶然なのかもしれませんね。
撮影: たっちゃん様



2019/11/1「ベニバト」酒田市
ドバト、キジバト、アオバト、カラスバトそしてベニバトもいる。5レンジャーができますね。それにしても鳩胸よ！
撮影: とし様



2019/11/4「チフチャフ」酒田市
チャウチャウチャウねん。チフチャフとなくから英名も和名も同じチフチャフ。ムシクイの仲間なので、ただ見ただけでは見分けが…。
撮影: とし様



2019/11/13「イヌワシ」酒田市
求愛期のシーズンを迎えているイヌワシ、この通信が発行されるころには、しっかりと抱卵していたいただきたい！
撮影: 齋藤修様



2019/11/29「ヤマネ」酒田市
フクロウの巣穴を清掃中に出てきたそうです。一度寝に入ると暖かくなるまで起きない主義なんだとか。その後そーっと戻してあげたそうです。
撮影: 齋藤利孝様

全国の動物情報コーナー



2019/12/14「マガモ×カルガモ」鶴岡市
公園のお堀はこの時期、多くの水鳥たちが利用する都市部の探鳥スポットですが、距離の近さも魅力ですよ。よ〜く見ればちょっと変わった個体もいたりして！
撮影: なおちゃん



2019/12月「チュウヒ」新潟県
一方は大陸型のカラーリング。お互いが縄張りを主張する血で血を洗う争い。
撮影: 波多様



2019/12/18「ツシマジカ」長崎県
通過したその時はいなかったのに、振り返ればシカがいる！
撮影: 本間憲一

Interview

突撃! 鳥海イヌワシみらい館 14



ヒメギフチョウ

ネイチャーアカデミーもがみ 矢口末吉さんに聞く



米渥原



矢口末吉 ● やぐち まつよし

1949年山形県金山町出身。ネイチャーアカデミーもがみ代表理事。NHK山形放送局の夕方のニュース内コーナー「四季のやまがた」に最上地域の案内人として出演。2018年より鮭川村教育委員会教育長。

—— ネイチャーアカデミーもがみとはどのような会ですか？

現在47名の会員で活動しており、最上地域の植物相や動物相を明らかにしていくとともに、地域の自然環境を守っていくことを目指しています。最近、私達の保護・保全活動によって新庄市に生息しているチョウセンアカシジミが復活しました。絶滅寸前まで減少したチョウの復活は地域の方々の励みとなっています。今では地域住民が中心となって「チョウセンアカシジミを守る会」を結成し、保護活動が行われています。

—— チョウセンアカシジミの存在をあえて公開して守ることについて周囲の反応はいかがですか？

鮭川村文化財保護審議委員を務めていた時のことですが、鮭川村でギフチョウ、ヒメギフチョウが村指定天然記念物になりました。当時は「公表すれば大勢の人がやってきて採集圧がかかる」と反対された過去があります。そのような考えは現在においてもありますが、専門家による「現代はそういう時代ではない、大勢の目で見守る時代だ」という意見から、公開しながら保全することになりました。観察して生態を理解していただき、一緒に守っていくというバランスのとれた保護の在り方を実施しています。

—— ネイチャーアカデミーの活動の成果は何ですか？

地域の自然環境を明らかにしてき



チョウセンアカシジミ



自然観察



ザゼンソウ



チョウトンボ

小中学生のうちに、自然をいっぱい見て体験することが大切。

たことで、住民の方々に地域の自然を再認識していただけたことは大きな成果だと思います。ギフチョウ属についても、どこにでもいる黄色いチョウだと思っていた方々が、チョウの生態を知ること、地域の誇りに思うようになってくれました。また、地域の方々の自然に対する意識が高まり、「地域の宝」として保全活動に立ち上がってくれていることに感謝しています。

—— 鮭川村米湿原の魅力とは？

山の中にぽっかり開けた場所があるだけでもすごいことですが、高山帯の湿原よりも植物の数が多く、周辺の山林も入れると300種近い植物が見られることです。特にラン類のトキソウやミズチドリが群生しており、とても良い環境なのだと思います。シーズンには、ノハナショウブとキンコウカのコラボやサワギキョウの蛍光色のような花が群落を作り見事な花畑に変わるところが魅力的です。また、山形県内でも滅多に見られなくなった、サギソウの自生などが見られるのも魅力のひとつです。湿原駐車場周辺にも、大群落をつくっているオオイワカガミは全体的に色が濃かったり、絶滅危惧種のヒメシャガが普通のように自生したりしていて、おもしろい場所となっています。動物相は、山形大学による自動撮影カメラを使った調査によってクマやキツネ、アナグマなどが撮影できました。

昆虫では、一時的になくなっていた待望のハッチョウトンボも帰って来ました。

また、米湿原の近くに保全池を人工的に作ったところ、ゲンゴロウ類やチョウトンボなど、現在では各地で見られなくなってしまった生物たちの生息が確認されています。米湿原は、交通利便の良さから観光地として、お客さんが多く訪れるようになりました。以前は入山者が増えることによって数多くの盗掘がありましたが、今ではほとんどなくなりました。ただ写真撮影のために、植物を踏みつけてしまうといったマナーが問題になっています。

— 昨年の豪雨で大量の土砂が流入し、湿原の半分ほどが埋まってしまいましたが、できるだけ土砂を片付けて復活のための整備をしています。

—— 身近な環境変化について感じることはありますか？

オキナグサ、アズマギクが最近は見られなくなってきました。それは、里山が活用されなくなり、芝地のような環境が無くなってきたことが原因です。県内でも平地で大群落が見られるのは、しっかり手入れされている山形空港くらいじゃないでしょうか。以前、鮭川にはカワヤツメが上って来ていましたが、最近ではほとんど見られなくなりました。最上川大堰ができたことによって遡上する魚類が影響を受けていると考えられます。以前はスズキヤ

ボラが海から60km離れた鮭川村でも見ることができたのです。それは、大潮になると海水が鮭川まで上がってきていたからだと思います。

—— これからの環境はどうなると思っていますか？

地方の山間部が人口減になっていくことは避けられないでしょう。そうすれば大昔の自然に回帰していくことかなと思います。日本でも地球温暖化が騒がれてはいますが、生物多様性や人と動物各々にとって好適な環境を保つという部分では、影響が大きいのではないかと思います。

—— 次の環境を担う世代に一言

子ども達には自然の中で様々な経験をしてもらいたいと思います。蚊やブユに刺されるなども重要な体験なのではないかなと思います。私が子どもの頃は木登りをして落ちたり、ナイフで指を切って血を流したりするなど日常的に経験していました。そんな経験・体験から危険を察知し、傷つけば痛いという当たり前のことを知ったのです。最近は教育の場でも、そうした経験の機会がなくなってきています。小中学生のうちにいろんな場所・自然をいっぱい見て体験し、大人になってから守らなければいけないと感じる自然環境があれば、ぜひ保全・保護活動に立ち上がってほしいものです。

イベント開催報告

○出張展示「やまがた環境展」

10月26日(土)・27日(日)山形市のビッグウイングにて開催された「やまがた環境展」に出展しました。

今年初お披露目の展示物として「ドングリ落とし」を出展し、多くの子供たちに遊んで行ってもらいました。

イヌワシとヤマドリとドングリの食物連鎖の関係を学ぶことができます。2日連続で来場し体験していつてくれた子どももいて、とてもありがたかったです。

今年は来年度のレジ袋有料化に合わせて、ビニール袋を配布する場合はすべて有料とすることなど、環境に配慮して開催されました。

来場してくれた皆さんありがとうございました。



○観察会「ハクチョウを数えて親指を鍛えよう！」

11月16日(土)酒田市の最上川河口スワンパークにて、「ハクチョウを数えて親指を鍛えよう！」と題して観察会を開催しました。講師は長年にわたり最上川河口にてガンカモ類の調査をしているワイルドライフリサーチの鶴野レイナさんです。ガンカモ類が1万羽いると言われる最上川河口ですが、どこで誰がどのようにして数を計測しているのかを知っていただくために開催しました。

当日の天候は曇り。6:30からの開催ということで、参加者の皆さんもがんばって早起きして参加してくれました。

まず鶴野さんの案内で、調査員が定点でハクチョウのカウント調査をしているところを見ていただきました。その後参加者にも実際にカウンターを使って、ハクチョウを数えていただきました。2400以上カウンターを押した子供もいて、タイトル通り親指が鍛えられたものと思います。

早朝の最上川にはハクチョウたちがひしめき合って「コーコー」と鳴き声が響き渡っていました。実は最上川河口は環境省の「残したい日本の音風景100選」において「ハクチョウの鳴き声」で登録されています。いつまでもハクチョウたちが飛来し続ける最上川であってほしいと、参加者の全員が感じてくれたに違いありません。講師の鶴野さん、参加してくれた皆さんありがとうございました。

この日見られた鳥:オオハクチョウ、コハクチョウ、アメリカコハクチョウ、マガモ、オナガガモ、コガモ、トモエガモ、カワウ、カルガモ、カイツブリ、カンムリカイツブリ、ホシハジロ、ハジロカイツブリ、ミミカイツブリ、オオバン、ダイサギ、アオサギ、カワアイサ、オオヒシクイ、オオタカ、トビ、クイナ、ノスリ、ツグミ、カワラヒワ、ウミネコ、ハンボソガラス、スズメ、ムクドリ、カモメsp 計30種



○西荒瀬保育園出前講座「ハクチョウ観察会」

11月21日(木)酒田市の西荒瀬保育園からの依頼で「ハクチョウ観察会」の出前講座を開催しました。みどりの保育園事業で、年間を通して様々な講師の皆さんから環境について学ぶ年度内最後の講座です。庄内平野の田んぼの中で餌を食べるハクチョウを観察してから、最上川スワンパークでもハクチョウやマガモなど多くの水鳥達を観察できました。

保育園に戻ってからは室内でスライド講座をしました。元気いっぱいの子供たちと活動できてこちらもパワーをもらいました。またぜひ呼んでいただければと思います。西荒瀬保育園の皆さんありがとうございました。



○「ジャパンバードフェスティバル2019」にて 展示部門優秀賞「バン賞」受賞しました！

11月2日(土)～3日(日)千葉県我孫子市にて開催されたジャパンバードフェスティバルに出張展示しました。

ジャパンバードフェスティバルは日本最大の野鳥イベントで、各地から野鳥関係者の他、鳥の愛好家が一堂に会するお祭りです。日本のみならず海外からの出展もあり、世界の野鳥保護の事例や取り組みについても知ることができます。

当館の展示では、さわれるものを多く展示し、遊びながらイヌワシの生態と保護活動の取り組みについて知ってもらえるように工夫しました。また、やまがた環境展で出展した「ドングリ落とし」に改良を加えて、より気軽に遊びやすくしました。ドングリ落としはゲームセンターにある「コイン落とし」ゲームのコインをドングリに変更して、教育的要素を持たせた電動のアトラクション型展示です。ボックス内をフィールドに見立てて、体験者がドングリを落としながら追加していくと、フィールドの中にドングリが増えていきます。ドングリが増えれば、それを食べる動物たちが増え、その動物を頂点捕食者の猛禽類がつかまえるという、一連の食物連鎖の量と流れを学ぶことができます。

酒田市は最上川河口スワンパーク、飛島、鳥海山と、野鳥とはとても深いつながりがある地域です。しかし、休日になれば多くの人たちがショッピングモールやゲームセンターで遊んでいる状況を目の当たりにし、こういった一般にも人気でなじみがあるアトラクションを使って、少しでも環境分野にも目を向けてもらいたいと考え作成しました。

2日目に出席団体の審査発表があり、数ある出展団体の中から展示部門の優秀賞「バン賞」をいただくことができました。JBF実行委員長である山階鳥類研究所所長 奥野卓司先生からも「大変面白い」という評価をいただきました。令和初の最優秀賞「オオバン賞」は北海道の「シーバードフレンドリー推進協議会」でした。

以前、首都圏から鳥海イヌワシみらい館に訪れてくださった方々も来てくれて、久しぶりの再会に花を咲かせました。2020年はいよいよ東京オリンピックの年でもあります、ジャパンバードフェスティバルも記念すべき20回目を迎え、当センターも開館20周年を迎えるメモリアルイヤーです。ぜひ山形県酒田市の鳥海イヌワシみらい館にもお越しいただければと思います。ブースに来場してくれた皆さんありがとうございました。



イベント情報コーナー

観察会 「ザワつく！ 早春の野鳥観察会～庄内平野でワシやタカ、ハクチョウを探そう～」

期 日 令和2年3月1日(日)

時 間 8:30～12:00

会 場 飯森山公園駐車場

講 師 築川堅治(日本野鳥の会山形県支部長)

参 加 費 一人500円(保険・資料代)

募集定員 先着20名

持 ち 物 双眼鏡(貸出可)

募集期間 2月3日(月)～2月27日(木)

お申込み・お問合せ(土・日・祝を除く)

鳥海イヌワシみらい館(猛禽類保護センター)

TEL 0234-64-4681 FAX 0234-64-4683

E-mail: moukin@raptor-c.com



夏羽に換羽中のカンムリカイツブリ



蜂蜜の森から

第12回「和蜂と洋蜂」

山形県朝日町で蜜ろうそくの制作を通して、自然のすばらしさを伝えている安藤竜二さんによるコラムのコーナー第12回目です。蜂蜜の森を通して私たちが暮らす環境を見つめなおしてみませんか？



ニホンミツバチ



ニホンミツバチの巣箱

和蜂はニホンミツバチのことで、洋蜂はセイウミツバチのことです。和蜂は洋蜂と比べると、温厚でめったに刺さず、世話もやかないため飼われる方が増えています。日本が誇る伝統養蜂です。ただ、群れが小さいのでハチミツの収穫量は少ないです。

近頃の和蜂ブームは、テレビで頻繁に取り上げられることもあり、益々盛り上がっているようです。和蜂のハチミツは洋蜂のものよりも希少価値があるとしてかなりの高値です。おかげで実家のハチミツや私の蜜蝋が洋蜂のものと知って落胆するお客様も少なくありません。残念なことに、侵略してきた外来種の洋蜂VS住処を追われた悲劇の在来種の和蜂論を戦わせる方がいます。私も以前、和蜂を数箱飼育していましたが、そんなこともあり、すっかり熱が冷めてしまいました。

和蜂は自然界にくまなくすむ野生のミツバチとして、野山の隅々まで飛び回り、植物達の受粉を助け、実らせ、多くの野生の生き物や、人にまで豊かな実りをもたらしてきました。大切な役割を担った蜂と

いえます。

片や明治時代に輸入された洋蜂は、畜産業としてハチミツやローヤルゼリーを身近なものにし、日本人の健康に貢献してきました。蜜蝋は医療用軟膏や座薬、化粧品、絶縁材料、木材や革の仕上げ材使用されています。何より洋蜂は、様々な農産物の受粉活動に幅広く尽力しています。元々洋蜂は、輸入されたイチゴの花粉交配のためにほぼ同時期に輸入された歴史があるのです。

働きは違えども、人間にとってどちらのミツバチも同じくらい感謝すべき存在と言えます。私はどちらのミツバチも大好きです。



安藤竜二（あんどう りゅうじ）
1964年生まれ。養蜂を学んだ後1988年に、日本ではじめての蜜ろうソク製造に着手。ハチミツの森キャンドル代表。日本エコミュージアム研会理事。山形県養蜂協会監事。編著『朝日岳山麓養蜂の営み』（朝日町エコミュージアム研究会発行）



Illustrated by Masami Tsuno

©鳥海イヌワシみらい館

普及啓発担当

対馬野生生物保護センターの皆さんありがとうございました。勉強になりました。今年はオリンピックにはやぶさ2帰還、猛セン20周年と大忙しの1年になります！気持ちだけ！（本）

希少種保護増殖等専門員

今冬はイヌワシの生息する山間部でも積雪が少ない！イヌワシの繁殖へどのような効果や影響がみられるか気になるところです。（長）

事務局

「ご当地キャラクターに応援メッセージを年賀状で書くプロジェクト」に賛同したらワッシーくんにたくさんいただきました。皆様ありがとうございました。（村）

鳥海南麓自然保護官20周年記念イヌワシ絵画コンクール実施中です！詳しくはホームページまたはフェイスブックを見てご応募ください！（澤）

編集後記&施設情報

鳥海イヌワシみらい館 1月～3月の開館情報

開館時間・・・9:00～16:30

入館料・・・無料

休館日・・・1月・2月毎週（火、土、日、祝日）3月より毎週（火）

臨時休館日はホームページにてお知らせします。

ホームページアドレス：<http://www.raptor-c.com/>

<https://www.facebook.com/Raptoreagleraptor>

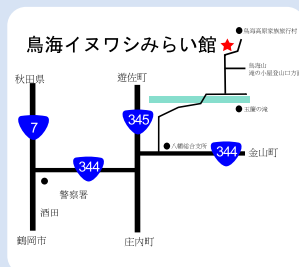
猛禽類保護センター

〒999-8207

山形県酒田市草津湯ノ台71-1

TEL 0234-64-4681 FAX 0234-64-4683

E-mail: moukin@raptor-c.com



鳥海イヌワシみらい館通信
Vol.33 新年号

発行: 猛禽類保護センター活用協議会
(事務局 鳥海イヌワシみらい館内)